

相談援助活動における「カウンセリング」学習の効果について ——「魔法」から「自己へのまなざし」へ——

永田 理香

問題の所在

—「カウンセリング」は社会福祉専門職の葛藤を解消する魔法?—

「関係が魔法のように変わる。」

これは、ある社会福祉専門職が「カウンセリング」に対して抱いていた「イメージ」である。

群馬県社会福祉協議会で社会福祉専門職に対する研修の企画・運営をしていた当時から“ひっかかっていた”のは、「カウンセリング」の技術を習得することにより、自分の援助技術がみるみるうちに向上するという“幻想”の存在であり、その存在を信じ定員を超え申し込んでくる福祉専門職である受講者たちの存在であった。「カウンセリング研修」の「人気」は、社会福祉専門職の「葛藤」の度合いに比例しているかのように感じられた。

なぜ、それ程までに社会福祉専門職は「カウンセリング」を学習したいのか? 日々の利用者、職員同士との関わりの中での戸惑いや葛藤、疲弊した関わり形成をいっぺんに「変える」手段、“魔法”として彼等は「カウンセリング」に期待し、行き詰まった際の切り札としてそれを手に入れることを切望しているのではないか。しかし、「カウンセリング」を学習することによって得られるのは、“魔法”の使い方ではなく、自分をみつめる“まなざし”であった。

本論文では、この社会福祉専門職の自分をみつめる“まなざし”形成、つまり、社会福祉援助活動におけるカウンセリング学習の有効性について検討を試みたい。カウンセリングは、直接的に社会福祉援助活動に効果を発揮するのではなく、社会福祉専門職の学習を通して初めてその効果を発揮し、その過程において社会福祉専門職自身の変容をももたらす。社会福祉援助活動は社会福祉専

門職を通して表現されるものである。しかし、表現の主体である専門職が日常の実践の中で、自らの表現の型を意識する場面は非常に稀だといえる。そういった社会福祉援助活動の意識化の契機をカウンセリング学習は提供しているといえよう。

以上のような問題意識に対する考察の方法として、カウンセリング研修受講者を対象にした調査結果からカウンセリング学習への動機付けおよび効果についての分析を行ない、カウンセリング学習による、“魔法”から“まなざし”への変容を検証していきたい。

I 社会福祉と「カウンセリング」の関係

1. 社会福祉学における「カウンセリング」の位置

学問的にみると、「カウンセリング」は社会福祉援助技術の体系の中に「関連援助技術」として位置付けられている。社会生活を総合的な視野から援助する社会福祉の課題に対応して、隣接科学からとり入れられた援助技術の一方法として位置付けられている。

社会福祉援助技術は細分化された諸援助技術によって構成されているが、それは便宜的な分類であり、「すべての社会福祉援助技術は、究極的には利用者支援に方向付けられた包括・統合的な特性をもつ一つの方法である」(福祉士養成講座編集委員会 2001)とされ、各援助技術のもつ目的の共通性が強調されている。この共通性の中での「カウンセリングの特性」は、密接な関係をもって共に発達してきた「ケースワーク」、およびそれを包括する「ソーシャルワーク」との関係において語られることが多い。

まず、アプテカー (Aptekar, H. H.) は、その著書『ケースワークとカウンセリング』

(*The Dynamics of Casework and Counseling*, 1955)の中で、「カウンセリング」を「具体的サービスを伴わないケースワーク」として位置付けている。

さらに、「カウンセリング」「ケースワーク」それぞれの特性について、以下のように記している。

「ケースワークと違ってカウンセリングは、私的に、そしてまた機関の資源を頼る必要なしに行なうことができる。救済基金や、里親の家庭や、家政婦といったものは必要でない。ここで必要なものは、問題をもった人間と、みずからすすんでその問題に集中するもうひとりの人間とのふたりである。このことは、ケースワークにおいてもまた同じように本質的なものではないだろうか。その答えは次のとおりである。すなわちケースワークの場面においてもまた、問題をもったものと、それを解決するのに必要な技能をもったものとのふたりの人間が会うが、さらにもうひとつの別の要因、すなわち、ワーカーが行なう具体的サービスという要因もワーカーによって考慮され、その問題に集中するようにしなければならない、ということである。」(Aptekar 1955)

アプテカーは、「ケースワーク」と「カウンセリング」について、具体的サービスの有無によって両者の区別とし、その点において強調したが、最近の動向としては、「福祉カウンセリング」という新たな分野が登場し、両者の共通基盤に注目した、「カウンセリング」を社会福祉援助技術に積極的に取り入れていこうとする「福祉カウンセリング」という流れがある。「福祉カウンセリング」については、以下のように定義されている。

「福祉カウンセリングとは、個人と環境の不均衡を、その生活の場において調整していくという、社会福祉の枠組みによる援助過程に、カウンセリングの技法を用いること、すなわち、ソーシャルワークにおけるカウンセリング対応と定義することができるのである。」(小林 2000)

さらに、福祉カウンセリングの立場からの、「ソーシャルワーク」への言及をみると、「ソーシャルワーカーが人間関係の質と特徴に深く関心をもつべきであるならば、ソーシャルワークの訓練は心理力動的立場のカウンセラーが受けている訓練

から学ぶのは当然である。」(Seden 1999)とし、すべてのソーシャルワークの仕事に、基本的なカウンセリング・スキルが重要であるとしている。そして、カウンセリング学習がソーシャルワーク実践において必要である根拠としては、以下の点があげられている。

- 関係が効果的な実践の中心的位置を占めている。
- 他者への尊厳という基本倫理は専門職業としてのカウンセリングとソーシャルワーク共通の基盤である。また、それは文化に敏感でなければならぬ実践にとって決定的に重要である。ソーシャルワークはステイグマを与えない援助過程が基盤になっているが、それはすぐれた人間関係スキルによって促進される。
- 全ライフサイクルにわたる仕事をするので、ソーシャルワーカーは危機介入やその他のカウンセリングの役割を果たさなければならない。(Seden 1999)

福祉カウンセリングにおいて、「カウンセリング」はソーシャルワークの理論、方法、枠組みを支える手段として理解されている。「カウンセリングの援助とは、一人一人に合った言わば「オーダーメイド」の援助である。」(平木 1997) この、「オーダーメイド」という表現は、「カウンセリング」とソーシャルワークとの共通性を象徴している。「個への視点」によって形作られた「ソーシャルワーク」という輪郭を浮かび上がらせるのは、同じく「個への視点」によって編まれた「カウンセリング」理論の存在であろう。ここに、「福祉カウンセリング」の存在自体が物語っている、社会福祉学への「カウンセリング」の援用可能性、そして援助者が「カウンセリング」を学ぶことの意味を見出すことができるのである。

2. 社会福祉施設におけるカウンセリングの位置

母子生活支援施設の平成13年度予算案において、「虐待や暴力を受け心に深い傷を被っている母子に対して、カウンセリング等の心理療法により心の傷を癒すための心理療法担当職員の配置」に係る経費が新たに計上された。その他、児童養護施

設等の職員配置についても、大学で心理学を修め心理療法の技術を有する者を週5日間程度勤務する非常勤職員として配置し、児童及びその保護者の心のケアを行なうという積極的な取り組みを促す動きがみられる。また、児童相談所における相談活動においても、その問題の多様化・複雑化から、家族サポートや地域サポートなどの視点をもつ総合的なアプローチが必要とされ、心理職ただ一人がカウンセリングを行なうだけでは、問題がなかなか解決できない現状がうかがえる。

このような動向は、社会福祉におけるニーズが、福祉サービスによるケアのみならず、心理的ケアの必要性、緊急性をも包括する形で提示されていることを証明するものである。児童福祉分野に限定されることなく、全ての社会福祉の領域においても心理的ケアへの注目はなされており、高齢者の分野で痴呆性高齢者を対象にした「回想法」が積極的に行なわれているのもその一例であるといえる。

社会福祉施設におけるカウンセリングは、心理職だけが担うものではない。社会福祉専門職は心理職と連携し、協働して「社会福祉施設におけるカウンセリング」を構築していく役割を担っている。田中(2001)は、福祉分野において心のケアの問題が最初に取り上げられたのは乳児院におけるホスピタリズム論争であるとし、その歴史性を評価しつつも、「今までの福祉領域のケアは、ソーシャルワークや日常生活の介助などの福祉ニーズの対応に追われがちなため、福祉ニーズに含まれた心理的ニーズの対応や心のケアの問題については軽視されがちであった。今まさに福祉領域においても、クライアントを一人の人間として遇する「心のケア」への取り組みが強く求められている」(田中 2001)としている。そして、福祉領域のカウンセリングの課題を、人間の心の問題に携わっているさまざまな領域を結びつける《掛け橋機能》として位置付けている。

この《掛け橋機能》の意義を保障するためには、その前提としてのカウンセリングに対する理解が必要となってくる。社会福祉専門職は、自己の援助活動の中にちりばめられたカウンセリング的要素

を感じとっているはずである。しかし、それらは意識化されることは難しく、確固たる手法という「型」として捉えられなければ存在していないのではないかと消極的に認識されてしまう傾向にある。そういった社会福祉専門職の「遠慮」が、社会福祉施設における「カウンセリング」の輪郭をぼやけたものとしているのかもしれない。だからこそ、援助活動において必要だとは強く思っているが、曖昧にしか捉えてこなかった「カウンセリング」を学習する機会は、彼等に期待を付するに値するといえる。「カウンセリング」に対する認識を明確化することは、総合的アプローチへの足掛かりであり、自己の援助活動を明確化することにつながっていくのである。ここに社会福祉専門職の「カウンセリング」学習の意義が認められるのである。

3. 社会福祉専門職という文脈からの学び

個性を持つ人間同士、援助関係においても、その個性同士のぶつかり合いは避けがたいものである。「自分とは合わない」と感じることは、他者をカテゴリー化することであり、その感覚は今までの経験を通じて生まれてくるものである。社会福祉専門職にとって「対応しにくい」ということは、個人的経験を通して利用者を見るという作業が行われていることの証であり、また、そういった面を含みながら援助活動は構築されていくということを自覚していなければならないということである。

つまり、社会福祉専門職は自分の心の傾向を把握しなければならないということである。自分にとっての「都合の良い利用者」が、援助活動における「対応しやすい利用者」であるのかという自己に対する問いを、常に投げかけていく作業が求められてくる。この、「自己への問いかけ」という視点は、カウンセリングを学ぶことによって強化されていくと考えられる。「カウンセリングを学ぶ」ということは、その技法を習得することだけでなく、自己を見つめる術を身につけることと言える。そして、「社会福祉専門職として学ぶ」ということは、その学びを自己内に留めることな

く、援助活動という表現として他者に伝える責任を意味するものである。

本論文でいう「カウンセリング」は、上述した「福祉カウンセリング」といった、領域独自のカウンセリングという意味に限定されない。心理学における「カウンセリング」そのものへの視点、つまり、利用者主体の援助関係構築の一助として、「カウンセリング」を学習する効果についての考察を目的としている。「社会福祉専門職としての構え」を見つめ、自己教育力を高めることを「カウンセリング」の学習場面に期待するものである。

「利用者を取りまく環境」、「出会い、対話する他者としての利用者」、そして「社会福祉専門職としての自己」。社会福祉援助活動は、この三つの次元の相互作用によって構成されるものである。この三位一体の実践によって、社会福祉専門職はその専門性を所有することができるといえよう。つまり、「実践」こそ、「学び」そのものなのである。その実践の主体としての自分を見つめる鏡を「カウンセリング」は形作っているのである。

Ⅱ 学習場面としての「カウンセリング研修」

——群馬県福祉マンパワーセンター主催「平成13年度カウンセリング研修」受講者への調査結果から——

1. 調査目的と方法

平成13年11月12日、13日の両日にわたって群馬県社会福祉協議会群馬県福祉マンパワーセンターが主催する、「平成13年度カウンセリング研修」が実施された。対象は県内の社会福祉従事者であり、定員60名のところ受講者は84名であった。本研修は、「カウンセリングの基礎理論を通して、生活の場としての施設における、利用者の主体性を尊重した援助関係について学ぶ」という目的の元、企画・実施されている。講師は実施以来立教大学コミュニティ福祉学部教授の福山清蔵氏であり、本研修は平成9年度から実施され、平成13年度で5年目を迎える（筆者は平成10年度から12年度において本研修を担当した）。

平成13年度の研修内容は以下のとおりである。

1) カウンセリングの考え方と視点

- ① なぜカウンセリングが注目されているのか
- ② カウンセリングはそもそも何をすることか
- ③ 社会福祉とカウンセリング
- ④ 社会福祉施設におけるカウンセリング

2) 援助関係の基礎

- ① 「聴く」ということ
- ② 「人生曲線」（人生の危機）
- ③ 「感情を聴く」ということ
- ④ 「思い込み」ということ
- ⑤ 「聴かない」ということ

3) カウンセリングの技術・態度

- ① 「聴く」ための技法—1
- ② 「聴く」ための技法—2
- ③ 「聴く」ための技法—3

4) 「グリーンワーク」の意味

複数年にわたる同一講師による研修は、群馬県福祉マンパワーセンターが実施している他の研修においては見られないことである。その効果として、回を重ねるごとに講師である福山氏によって内容が吟味され、テキスト化されていくという過程を経ている。また、テキストの内容に加え、様々な手法による演習が実施され、受講者が主体性を持ってカウンセリングを学ぶ工夫がなされている。その結果、毎回定員を超えての申し込みがあり、他の研修と比較してニーズの高い研修であるとの評価を受けていた。

今回の調査では、「カウンセリング研修」の“人気”を分析すること、つまり社会福祉専門職は「カウンセリング」になにを期待し、そして受講後なにを学び変容していくのかの検討を行なっていきたい。

調査方法としては、研修受講者を対象に質問紙調査を行なった。質問項目については、社会福祉専門職が社会福祉援助活動とカウンセリングの関係性をどのように捉え学習への動機付けにしているのか、また、本研修受講後にどのような変容があったのかを把握できるようなものとし、質的質問項目を重視し、回答者の表現をよみとる作業を行なった。

2. 調査結果について

調査対象：本研修受講者84名

回収数：69 回収率：82%

【調査対象者の属性】

研修受講者の属性 (n=84)		回収数	回収率
1 年 齢	20代	21	30%
	30代	20	29%
	40代	20	29%
	50代	8	12%
	60代	0	0%
	70代	0	0%
	無回答	0	0%
	合 計	69	100%
2 性 別	男	21	30%
	女	44	64%
	無回答	4	6%
	合 計	69	100%
3 施設種別	老人福祉施設	33	48%
	児童福祉施設	5	7%
	障害児者福祉施設	19	28%
	社会福祉協議会	7	10%
	その他	4	6%
	無回答	1	1%
合 計	69	100%	
4 職 種	指導員	16	23%
	生活相談員	16	23%
	介護職員	11	17%
	介護支援専門員	5	7%
	事務職	3	4%
	看護師	2	4%
	SW	2	4%
	母子指導員	1	1%
	児童指導員	1	1%
	保育士	1	1%
	職業指導員	1	1%
	児童自立支援専門員	1	1%
	栄養管理士	1	1%
	無回答	8	12%
合 計	69	100%	
5 実務経験	0～5年	39	57%
	5～10年	17	25%
	10～15年	5	7%
	15～20年	1	1%
	20～25年	3	4%
	25～30年	0	0%
	30～35年	0	0%
	無回答	4	6%
合計	69	100%	
6「カウンセリング」の学習経験	学校教育で	20	29%
	職場の派遣研修で	9	13%
	その他	2	3%
	なし	38	55%
合 計	69	100%	
7 本研修に参加したきっかけ	職務命令のため	36	52%
	自主的に	27	39%
	その他	1	2%
	無回答	5	7%
	合 計	69	100%

【質問1】本研修に参加するに当たり、どのようなニーズをお持ちでしたか。

回答数51 回答率74%

〔主な回答〕

- カウンセリングの知識と技術の習得(同様17件)
- 今の職場に生かせるものを学びたい(同様10件)
- どのように言葉かけしたり, どのような態度で利用者に対応するのか, 相談業務を適確に行なう上で必要なものを学びたい。(同様3件)
- 相手の話を聞くこと, 話し易い空気を作ることについて学びたかった。相手の思いを引き出す方法について, いろいろなことを知りたいし, それを現場に生かしていきたいと思う。(同様1件)
- 自分を客観的に知りたい
- 利用者の話を聞く自分の姿勢に疑問を感じていたので, 再認識する機会かと思っていた。
- 日常的に疲れている, あるいは混乱している, 困り果てている人の相談援助に携わっており, 行き詰まっている。振り回されてしまっている。相手に対して批判的な自分や, 自分の価値観で測っている自分が見える。こういう自分でよいのだろうか。よりよい相談援助を行ないたい。
- 高齢者と話をする時, “もういつ死んでもいい”とか, “死んだほうがいい”とか投げかけられることがよくあり, そういう時に自分はどのような反応をしたら良いのか分からない。また, 相手の話を聞くときにどんな訴えをもっているのか掴めない。どうしたら良いか分からず思案している。

【質問2】本研修を受講する以前にもっていた、「カウンセリング」に対するイメージはどのようなものでしたか。

回答数60 回答率86%

〔主な回答〕

- 暗いイメージ
- 専門的で堅苦しい
- 関係が魔法のように変わる
- 学問的な, 専門家のみが用いる方法だと思っ

ていた。

- e. その人の悩みを引き出すことの大切さは分かっていたつもりであったが、単に相談にのり助言するというのを考えていました。
- f. 相手の話をすべて受け入れる
- g. 話を聞く、解決を与える
- h. 援助を必要とする人がカウンセラーという専門家に心の内を吐き出し、そのことによりアドバイスを受けながら立ち直っていく。

【質問3】 受講後、そのイメージは変化しましたか。

「はい」とお答えの場合には、どのように変化したのかご記入ください。

「はい」 51 (74%)

「いいえ」 6 (9%)

「無回答」 12 (17%)

〔「どのように変化したのか」主な回答〕

- a. 思ったより楽しかった
- b. 親しみやすくなった
- c. 地道につらい作業が必要
- d. 人に接する方法で参考になる手段であると考ええる。
- e. 様々な考え、感性に対し自分の枠を広げて対応していくことの大切さ、悩み等引き出すことの重要性を感じた。
- f. ただ話を聞くだけでなく、相手の気持ちを明確化したり、まとめることにより、見つけ直す手助けをする。
- g. 本人が問題を解決していく、成長していく
- h. 専門家でなくても、カウンセラーとして援助に誰でも当たれるということ、カウンセリングを身近なこととして捉えることができたこと。

【質問4】 あなたの職場において、「カウンセリング」をどのように生かせると思いますか。

回答数50 回答率72%

〔主な回答〕

- a. 在介で一軒一軒まわっていく上で、対個人への相談技術として生かしていけると思います。
- b. 高齢者のお宅を訪問した際、より積極的に話が聞けるようになる。

- c. 家族と離れて生活する方々にとって、不安や寂しさがたくさんあるため、研修で学んだカウンセリングを生かして、そういう方たちの心の支えになれば良いと思う。
- d. 利用者との直接処遇において、忙しさにかまけて利用者の声に耳を傾けることがなござりになりがちであるが、聴くことの大切さを実感したので、話をする機会を大切に考えられると思います。
- e. 利用者のニーズを検討していく中、本人、家族が何を考え、どのようにしていきたいのか、表面的なことのみには捕らわれず、真のニーズ抽出に役立てたいと思います。
- f. 来訪してくれる方だけでなく、職場内でも「カウンセリング」を必要とする人がいれば生かしていきたいです。

【質問5】 社会福祉専門職は、「カウンセリング」について学ぶ必要があると思いますか。

「はい」とお答えの場合には、その理由をお書きください。

「はい」 55 (80%)

「いいえ」 0 (0%)

「無回答」 14 (20%)

〔主な回答〕

- a. 相談者の心理面を知り、福祉サービスを提供すべきであると考えから。
- b. 人間を相手にした職業であるため、その専門家としては必ず学び得なければならない分野であると思う。
- c. 柔軟な対応ができるよう、学ぶ必要性がある。となく考え方が偏りがちになってしまうため。
- d. 「カウンセリング」ということよりも「聞く」という基本的なことを改めて学ぶことによって、利用者の心のケアにもっと幅がでてくるのではないかと思った。
- e. 人格、人権のある人を相手に仕事をしているのであるから必要であると思う。
- f. 当事者は対象者ではなく、生きる力のある同じ人間であることを大切にすることがあるから。

3. 考察

まず、調査対象者の属性についてみていきたい。「1 年齢」については、現場の第一線で働く職員がその年代ごとにバランス良く受講している様子が見えがえる。「2 性別」については、女性が6割以上を占め、多少の偏りが見とめられる。「3 施設種別」については、老人福祉施設が約半数を占めているが、県内の種別ごとの割合を考えると妥当な配分であるといえよう。「4 職種」については、社会福祉援助活動を担う職種以外にも、事務職などの幅広い職種が受講している様子が見える。利用者のみならず、家族などに対する窓口での対応等、福祉サービスの質が問われる現状を反映しているものと読み取れる。「5 実務経験」については、0～5年が約6割を占めた。経験が浅い程、受講者が多いということがいえる。「6 「カウンセリング」の学習経験」については、「なし」が半数以上を占め、「学校教育で」では3割に留まった。「職場の派遣研修」としては、本研修主催である群馬県福祉マンパワーセンターがほとんどを占めた。以前にも本研修を受講している回答者がいるということが分かる。「7 本研修に参加したきっかけ」としては、「職務命令のため」が約半数を占めている。「自主的に」参加も、約4割にのぼり、その理由としては、「前回参加した職員におもしろかったと勧められて」という、内容がある程度聞き、その上で興味をもって参加したというもの、「人と常に接している職業であることと、以前から興味がある内容であるため」という日々の仕事の中で自らが関心をもって参加したというもの、また、「カウンセリング技術の習得のため」という、技術的側面に絞って受講を希望したという、大きく分けて三つがあげられる。

次に【質問1】についてみていきたい。この質問では「カウンセリング」に対するニーズの明確化と整理を目的とした。この問いに対し、大きく分けて三つのカテゴリー化ができた。

まず一つ目は、知識・技術の習得をニーズとする、カウンセリングの基本を身につけたいという、回答aに代表される「基本の習得レベル」である。「習得」「勉強」といった表現がみられるのが特徴

である。このカテゴリーは、知識・技術の体系として「カウンセリング」を捉えている。つまり、大きな枠組みとしてカウンセリングを対象化し、教科書的な内容、基本と言われるものを習得する、そのこと自体が目的となっているといえよう。具体的な場面を想定した記述でないこともその特徴といえる。

二つ目は回答b, c, dに代表される、仕事上の必要性から生まれるものをニーズとし、具体的実践場面にカウンセリングの必要性を見出す「活用するレベル」である。このカテゴリーは、目的が明確化されており、自己の業務を客観化して捉えている。「生かす」「的確に」という記述が特徴的である。「生かす」ということは、相談援助活動を支えるものとして「カウンセリング」を捉えるということである。それは、カウンセリング的対応が求められる場面が整理され、意識化されているのが前提であるといえよう。また、「的確に」業務としての相談援助活動を行なうという姿勢は、一つ目のカテゴリーと比較して、カウンセリングを活用するという目的が明確化されていることであるといえよう。

三つ目は、回答e, f, g, hに代表される、自己の相談援助活動における迷い・疑問・葛藤を解消する機能をカウンセリングに期待する「適用するレベル」である。いずれも、「援助者としての自分」への懷疑から、「個人としての自分」という視点を持つに至った記述である。三つのカテゴリーの中で、最も相談援助活動を内省的に捉えているといえよう。自分自身の心の傾向を把握し、その上で相談援助活動を行なっていきたいという姿勢が見えがえる。しかし、自己の心の傾向を知ることによって、自分を見失うという逆説的な経験を彼等はすることになる。カウンセリングを適用することで、自分を取り戻し、軌道修正する作業に踏みこめるのではないかと期待が読み取れる。

それぞれのカテゴリーの特徴は、「カウンセリング」の認識の仕方によって生まれているものである。ニーズとは、必要とする対象のみならず、それを志向するという方向性をも含む概念である。研修参加へのニーズは、カウンセリングから何を

学びたいかという、学び手の意識そのものであると言えよう。

続いて、【質問2】、【質問3】について同時に考察していきたい。それぞれの回答のa~hは対応し、イメージの変化が分かるよう配列してある。

まず、「カウンセリング」全般に対するイメージについて記述されたものをみていきたい。a~dに代表されるこのカテゴリーは、カウンセリングに対して「誤解」していた自分への気づきが特徴であるといえる。学習の効果は「気づき」から生まれるものである。身近に感じられるようになったということは、そう感じている自分に気づき、「カウンセリング」という学習の対象に“なじむ”ことを意味する。イメージとは、実際に触れることなく想いを馳せるという行為であり、“なじむ”こととは対極に位置する。ここに大きな変容が認められよう。

次にカテゴリー化できるのは、e~hに代表される援助者としての自分という枠組みのなかで、「カウンセリング」を捉えている記述である。これらの記述に共通することは、カウンセリングとは答えを「与える」ことではなく、問題に向かい合い、立ち向かっていく力を「引き出す」ことであるという気づきである。そして、その力を引き出すことができる力量が援助者には求められるという自己への問いかけである。話を聴くことのできる力は、援助者にとって基本的なものである。利用者の語りを、援助者としての文脈から読み取り、相談援助活動として表現するという行為は、利用者の力を「引き出す」ことと同意である。それは協働する作業であり、援助者も自己を検証する契機を与えられている。

次に、【質問4】について考察していく。カウンセリングは社会福祉援助技術の体系に位置付けられ、相談援助活動を支える役割を期待されている。その意味が具体的にどう認識されたのかを問うことは、相談援助活動自体を見つめることにつながる。日常化した業務としての相談援助活動を、「カウンセリング」という切り口で検討することは、業務という客観化された枠組みを取り払い、自己とそれに向き合う他者とのつながりとい

う根源的な営みを見つめることを意味する。

回答のいずれも、利用者へのまなざしが主となっている。カウンセリングを相談援助活動において生かすといった記述がほとんどであった。カウンセリングを「生かす」ということは、利用者との関わりという場においてであり、そこには、関係を結ぶもう一方の側としての援助者も存在する。カウンセリングの具体的場面への適用ということでは、受講前の漠然としたイメージからの変容であるといえるが、相談援助活動だけでなく、活動主体である援助者自身への直接的なまなざしはあまり感じられない結果となった。また、職場の人間関係について生かせるという記述もみられ、利用者の生活の場を構成する全ての要素についてカウンセリングが有効であるとの認識がうかがえた。

最後に【質問5】について考察していきたい。ほとんどの回答者がカウンセリングを学ぶことが必要であると答えている。

回答の記述にみられる、「生きる力のある同じ人間」という視点から発せられた、カウンセリング学習の必要性は、カウンセリングの学習によって、「生きる力」から「生きていく力」という認識の高まりをもたらし可能性を感じさせるものである。「生きる力」とは、今、ここで自分が存在することへの気づきであり、生きることへの意欲を自分自身で感じることである。そして、「生きていく力」とは、「生きる力」を、自らを取り巻く環境の中で表明し、活用し続けていこうという意思を意味するものである。この「生きる力」から「生きていく力」への転化が相談援助活動の目的であり、その視点への気づきをカウンセリングにおける学習がもたらしていると評価できよう。

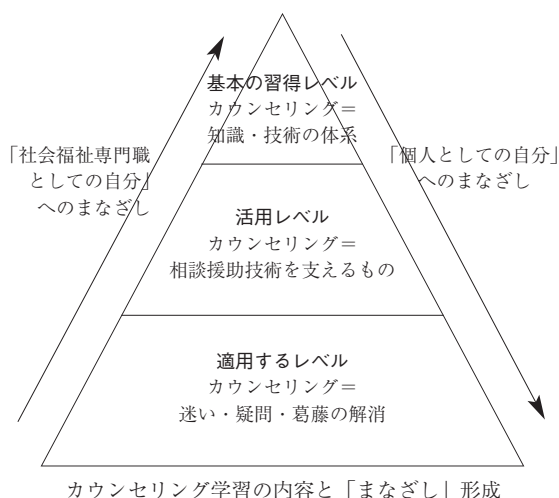
また、「柔軟」「幅」という表現もみられ、相談援助活動における援助者の「構え」についての気づきを、カウンセリング学習がもたらしている様子がうかがえる。つまり、援助者は自分の心の傾向を知ることによって、相談援助活動における「技術」と「人間くささ」のバランスを保持できるという気づきである。

以上、調査結果に対する考察を行ってきたが、受講者は「カウンセリング」を研修という場にお

いて「学習」していると結論付けることができよう。つまり、その場限りの受動的な経験として終始することなく、研修という経験を自己の中で再構成する作業がなされているということである。しかし、その学習は、相談援助活動の「仕上げ」として機能するものではなく、「始まり」として援助者の学習経験に刻まれるものである。

受講者は、数々の「気づき」をカウンセリング学習において手に入れることができた。その点で、本研修の意義を評価することができよう。だが、その「気づき」を実際の相談援助活動に効果的に「生かす」ためには、日常の実践の中において自分の心の傾向を知る、という作業が前提となってくる。「カウンセリング研修」は、限られた場において実施されるが、「カウンセリング学習」は、実践の場においても継続し深化されていくものである。

「社会福祉専門職としての自分」としてカウンセリング学習を進めていくうちに、「個人としての自分」へのまなざしに気づき、その気づきを実践の中で「学び」に転化していくことが自己の専門性であると認識する。この二重性において、つまり「個人として」「社会福祉専門職として」の自分をゆさぶり、その相互性を確認する作業そのものが、カウンセリングを学ぶということなのではないか。



Ⅲ まとめ

－カウンセリング学習が社会福祉専門職にもたらず可能性－

「ある看護婦が、ひとりの、いくらか緊張病がかった破瓜型分裂病患者の世話をしていた。彼らが顔を合わせてしばらくしてから、看護婦は患者に一杯のお茶を与えた。この慢性の精神病患者は、お茶を飲みながら、こういった。〈だれかがわたしに一杯のお茶をくださったなんて、これが生まれてはじめてです〉。」(Laing 1961)

これは、R. D. レイン (R. D. Laing) の『自己と他者 (SELF AND OTHERS)』の中で報告されている話である。この解釈について、鷺田 (1999) は彼女がなぜ「生まれてはじめて」と感じたかについて、レインよりも詳細に記述をしている。

「だれかにお茶を入れるということ、そのことが、他人に求められたからでなく、業務としてでもなく、もちろんティーセットを自慢するためでもなく、「だれかのため」「なにかのため」という意識がまったくなしに、ただあるひとに一杯のお茶を供することとしてあって、そしてそれ以上でもそれ以下でもない、そういうふうにして他人にお茶を入れてもらったと患者が感じたことはこれまでなかったというのだ。

ことばもなく、ただお茶を供するだけの行為が、どうしてこうも深い充足感をもたらすのだろうか。間がもたない、間をとれないという、わたしたちが日々、他人との会話のなかで味わうあのぎこちなさは、およそ正反対の時間である。」(鷺田 1999)

「それ以上でもそれ以下でもない」行為がもたらす深い充足感、それは、行為者の心の声を「聴く」ことから生まれる感情である。それは、会話の「間」を「聴く」ということであり、他者が発するメッセージを受止める、「聴くことのできる力」の意味を強く感じさせる瞬間である。カウンセリングにおいて重視する「聴く」という作業は、援助関係形成の基礎となるものである。なぜなら、「聴いてもらう」という経験は、「主体性」を取り戻す契機を与えるものであり、自己の存在証明とも成り得るからである。

つまり、「聴くことのできる力」は、行為の対

象によって承認される相互補完的なものであるということである。利用者がいて援助者が存在するように、他者を經由することによって、自己の存在感情が生み出されていく。専門職としてのアイデンティティは、所有するものでなく、利用者との関係のなかでそのつど確証されるものであるといえよう。その意味で、カウンセリングが援助関係にもたらす学びは大きいと言える。

実践としての「学び」は、個人が内的に構成する個別的な「意味の経験」であるといえる。その意味で、「学び」は、自分自身が自覚的に明確になること、つまり、アイデンティティ形成そのものであると言える。社会福祉専門職としての「学び」とは、社会福祉専門職としてのアイデンティティ形成であり、援助者としての自己を覚知する過程である。それは、知識や技術を身につけるということだけではなく、各人が「自分を育てる」こととしての「学び」を実現するというのである。「個人としての自分」を育てることから、「専門職としての自分」が育ちゆくと考えられる。その実現が困難な場合に、「行き詰まる」ということが起こってくるのである。

本研修の目的は、カウンセリングの技術を習得し、それをそのまま現場に適用するというものではない。相談援助活動を担う専門職として、自分を見つめる作業の厳しさ、その意味を問うものである。本論文の冒頭でも触れたが、「関係が魔法のように変わる」という記述に代表されるように、カウンセリングの技術さえ習得できたら万能な援助者になれる、というイメージを払拭するというのもこの研修の意図である。

「魔法」から「自己へのまなざし」へと「カウンセリング」への認識が変容することによって、利用者へのまなざし、つまり「他者へのまなざし」も変容していくことに気がつく。カウンセリングとは、「聴く」ことに象徴されるように他者とのつながりを紡いでいく「手がかり」を社会福祉専門職に提示するものである。その「手がかり」をどう援助関係に反映させていくか、それは、社会福祉専門職の「学び」への姿勢に依拠している。

「カウンセリング」の学習における自己存在へ

の「気づき」を、自己の援助活動に引きつけて「考え」、それを「学び」に転化していく作業は、社会福祉専門職にとって有効であるというよりも、必要不可欠なものであると思われる。なぜなら、社会福祉における専門性は、人と人との間にのみ存在するものだからである。カウンセリング学習による「自己へのまなざし」取得は、よりよく悩む援助者を生み出し、社会福祉専門職の専門性をさらに高める一助となると考えられる。

引用文献

- 福祉士養成講座編集委員会. 2001. 『新版社会福祉士養成講座 8 社会福祉援助技術論 I』中央法規出版: 134.
- Herbert H. Aptekar. 1955. *The Dynamics of Casework and Counseling*. Houghton Mifflin Company. (=1963. 坪上 宏訳『ケースワークとカウンセリング』誠信書房: 111.)
- 小林重雄. 2000. 『実践入門 福祉カウンセリング』川島書店: 13.
- Janet Seden. 1999. *Counseling Skill in Social Work Practice*. Open University Press. (=2000. 杉本敏夫訳『福祉カウンセリング入門』久美株式会社: 10.)
- 前掲書: 19
- 平木典子. 1997. 『カウンセリングとは何か』朝日新聞社: 1.
- 田中勝博. 2001. 「福祉カウンセリング領域における課題と展望」『カウンセリング研究』Vol.34 No.1. 日本カウンセリング学会: 97.
- R. D. Laing. 1961. *SELF AND OTHERS*. Tavistock Publications. (=1975. 志貴晴彦・笠原嘉訳『自己と他者』みすず書房: 126.)
- 鷲田清一. 1999. 『「聴く」ことの一臨床哲学試論』TBSブリタニカ: 84.

参考文献

- 佐伯 胖・藤田英典・佐藤 学編. 1995. 『学びへの誘い』東京大学出版会.
- 平木典子・巖岩秀章編. 1997. 『カウンセリングの基礎—臨床心理学を学ぶ—』北樹出版.

渡辺三枝子. 2002. 『新版カウンセリング心理学
カウンセラーの専門性と責任性』 ナカニシ
ヤ出版.

Ann O. Freed. 1993. The Changing Worlds of
Older Women in Japan. (=黒川由紀子・伊

藤淑子・野村豊子訳. 1998. 『回想法の実際
ライフレビューによる人生の再発見』 誠信
書房)

(立教大学コミュニティ福祉学部助手)